

2023

美術準備室

つ　く　る　・　み　る　・　感　じ　と　る

第 23 号

光村図書

特集
「私の風景」を描く
埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校

アトリエ訪問
プロダクトデザイナー

柴田文江

アートが生まれるとき
藤岡祐機

この1点
「最後の晩餐」
蔵屋美香

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

ア ト リ エ
訪 問

第 23 回

柴田文江

プロダクトデザイナー

オムロンの体温計「けんおんくん」や
無印良品の「体にフィットするソファ」など機能的かつ
美しいフォルムのデザインで日本を代表するプロダクトデザイナーとして
活躍する柴田文江。彼女のアトリエに伺い、ものづくりへのこだわりを聞いた。

文章 長谷川 華 撮影 永野雅子



さんと日差しが注ぎ込む打ち合わせスペース。背面は、オフィススペースとの間仕切り部分に設置された棚。プロダクトデザインに関する書籍や自身の作品、そして植物や雑貨などが並べられている。

「プロダクトの存在そのものが『美しい』ということはとても大事なことです。」

建物のワンフロアをまるごと活用している柴田さんのアトリエ。一応仕切りはあるものの、天井はすべて吹き抜けになっていて、解放感が漂う。さらに窓からは、都心の一等地とは思えない豊かな緑が広がっており、明るい日差しにあふれていた。

——ここをアトリエにした決め手は为什么呢。

柴田 なんといっても窓から見えるグリーンです。実は、近所に住んでいる大家さんのお庭の借景なのですが、これを見た瞬間にこの部屋をアトリエにしたい！と。

——アトリエの造りで工夫されたところはありますか。

柴田 解放感を大切にしたいので、アトリエ全体をできるだけひと続きの空間にしています。仕切りはあるけれど、天井の方は抜けていて声が聞こえるので、一緒に働いている仲間の様子がわかるようになっています。

今は作品のサンプルを作るにしても、3D プリンターなどがあるので、

効率がすごく上がりました。そういったツールを置いたり、工具を使ったり取れたりするのもこのアトリエのよいところです。

あとは小さいですけど、キッチンもあります。どうしてもアトリエにいる時間が長くなるので、ちょっと暮らしているみたいな気分にもなれ、リラックスしながら働くことができます。

——常にデザインのことを考えているのですか。

柴田 案件を受けると、それに対するアイデアの根幹みたいなものが生まれる「あっ」という瞬間まで、悶々と考え続けています。

そこにオンとオフはなくて、寝ても覚めてもという感じです。

——柴田さんの代表作の一つとなった体温計「けんおんくん」(※写真1)のときもそうでしたか。

柴田 このときは、クライアントから、自分たちのブランドを代表するような、家庭用医療機器メーカーのシンボルとなるような体温計を作り

たい、という要望がまずあったのです。

体温計は、病気のときに使うものというイメージもあるかと思います。病気といえばお医者さんの存在って大事ですけど、それに匹敵するものってなんだろう、などとずっとあれこれ考えて行き着いたのが「母の愛」でした。そして、それをデザインに生かせないかと。

——それを体現したのが、あの形というわけですか。

柴田 お母さんの優しさとか賢さ、



※写真1 中学校教科書『美術2・3』P.62に掲載されている「けんおんくん」。多くの人の使いやすさや安全性などに配慮してデザインされた「ユニバーサルデザイン」の一例として紹介されている。



上／考え抜かれたワークスペース。作業の際に出るゴミなどが散乱しないようガラス板で仕切られているが、仲間の顔が見えるように、オフィスとしてはひと続きの空間になっている。左／打ち合わせスペースの一角に置かれたガラスの一輪挿し「SACCO」は自身の作品。右／アトリエ内にあるキッチンスペース。来客に出すお茶の準備をしたり、ちょっとした調理もできるので、スタッフにも好評だとか。

信頼性を裏切らないものを体温計で表現したらどんな形になるだろう、と考え続け、あのようなころんとした形が生まれました。

クライアントから依頼を受けた2000年頃は、まだそんなに電子体温計が身近ではなかったので、これまでの体温計のイメージを一新するようなデザインにしたかった、というのがあります。それで形以外の工夫として、文字の表示を縦にしました。もちろん内部のメカニズムの問題で、できないこともあります。そのあたりは機能性とデザイン性のせめぎあいになるので、何度も微調整を重ねていきました。

——デザインを考える際に大切にされていることは何ですか。

柴田 それはその時々自分の状態によって変わっていくのですが、今ここにきて、やはりプロダクトデザインは美しくないとだめだと思うようになっていきます。

もちろん機能性も大事ですが、プロダクトの存在そのものが「美しい」ということはとても大事なことです。だからこそ使う側が気に入るわけですし、気に入れば長く使ってもらえる。「買い物」という行為をしたいだけでなく、デザインは気に入らないけれどとりあえず買っちゃおう、という消費行動を変えたいんです。

人間って、美しくて機能的であれば、それを長く使うもの。そういうプロダクトデザインを今後していきたいと思っています。



しばた・ふみえ
山梨県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。大手家電メーカーを経てDesign Studio Sを設立。電化商品から日用雑貨、医療機器、ホテルなどさまざまなプロダクトのデザインを手がけ、レッドドットデザイン賞(ドイツ)、毎日デザイン賞、グッドデザイン賞金賞など数々の賞を受賞。現在は、多摩美術大学教授も務めている。著書に『あるカタチの内側にある、もうひとつのカタチ』(ADP)。